

ちょっといわせてはいよ!

一年間の旅

中国国際交流員(CIR) 楊 淳麗さん

熊本市役所 12 階国際室の窓から熊本城が見えます。

今から一年前の春の日、日本に着いた私は、首都東京の喧騒、混乱の中に放り込まれました。オリエンテーションの後、美しく、人情溢れる熊本にやってきました。この一年を振り返りながら、熊本城を見ています。春・夏・秋・冬、熊本城の四季の風景が頭の中に浮かんできます。

成長の重さ

「光陰矢のごとし」、初めて熊本にきた時、すべてがとても新鮮でした。新しい環境で常に日本語に触れ、新しい言語・考え方・習慣を変えなければなりません。1 日が終わると毎日ヘトヘトで、帰宅したらご飯を食べる元気もなく、ぐっすり寝てしまっていたことを、昨日のこのように覚えています。

一方、仕事において、初めて市長表敬の通訳をした時に、市長の隣に座り、緊張でガタガタ震えて、話しの内容を上手に通訳出来ませんでした。また、ある学術訪問団の表敬で、教授たちが自分の研究分野について紹介する時に、経験不足と準備不足から、専門用語が分からず、うまく対応できず困りました。通訳経験を思い出すと、悔しい思い出ばかりです。

しかし、こういった経験こそ、私を鍛え、成長させてくれました。様々なハプニングに挫けることなく、「毎日が頭のトレーニングだ」と考え、仕事や異文化との交流を楽しみながら、うまくやるコツをじっくりと模索し続けてきました。今では日本に馴染み、日本の生活を楽しみ、仕事もだんだん慣れてきました。通訳の時の専門用語や人の名前はまだ苦手ですが、とにかく堂々と通訳するように心がけています。

「教える」と「教えられる」こと

「先生、昨日テレビで見た中国人が怖かったよ」、学校訪問の時、ある 3 年生の子供が私にこう言いました。その瞬間、正直ショックでした。「じゃ、先生は怖いかな?」「先生は怖くない、でもテレビに出てた中国人は怖いよ」。この対話がいつも私の心に残っています。中国は怖い人ばかりじゃない、どこでも PM2.5 や大気汚染だらけじゃない…子供、日本人々に、真の中国のことを教えたいという気持ちが日々高まってきました。



世界料理大会で中国料理作り



浴衣で日本文化体験



韓国・ドイツ CIR と一緒に女子旅

中国とはどんな国か、小学生たちに紹介することは私の仕事の一部です。また、国際交流会館で行われる「外国を知ろうサロン」と「中国語サロン」で、自国の文化や社会事情などを日本人参加者に教えることも。正直、交流員になる前は、自国の文化や習慣を普通だと思って毎日を過ごしてきましたが、このサロンで文化を紹介するため、たくさん資料を探しながら、中国の「普通」は日本で当たり前のことではないのだと初めて気づきました。人に教えるためには、自分でもしっかり勉強しなければなりません。しかし、国際交流では、「教える」ことだけではなく「教えられる」ことも大事です。サロンや授業、さらに日常生活を通して、人と直に話し、毎日新しい発見がありました。自分だけが話す場合、一方通行になってしまい、交流にはなりません。私が紹介した中国のことに対して、参加者が自分の国と比較し、意見を教えてくれるのは非常に面白かったです。国際交流の醍醐味は、この「人と人の触れ合い」にあると思います。

仕事のやり甲斐

この一年間、国際交流員としてさまざまな形で国際交流の現場で働き、異なる立場の 2 者（個人や行政機関・団体など）の間に立ち、円滑なコミュニケーションのため、言葉や文化の面で力を尽くしました。このように貴重な経験を積ませてくれるチャンスは、他になかなか無いと思います。この仕事のお陰で、色々な国の人と出会い、様々な文化を理解し、視野や将来の展望、更に自分の世界を広げることができました。

さよなら、熊本

卒業の季節、桜が咲き始め、4 月、春、入学の季節となり、別れと出会いが交差します。そして私の熊本への旅、暮らしがいよいよ終わりを迎えます。毎日温かい笑顔で挨拶を交わしてくれた市役所・国際交流会館の皆さん、お互いに励ましあい、一緒に頑張ってくれた CIR たち、家族のように世話をしてくれたホストファミリーや友達、サロンに参加して私の話を優しく聞いてくれた人々、貴重な経験と忘れがたい思い出をくれた熊本…本当に、ありがとう！

長いようで短い一年間、日本で様々なことを吸収しました。今度は自分が得たものを還元していきたいです。これから元の仕事に戻っても、新しい国に行っても、日本で与えられたたくさんの宝物のような経験を持って、自分の内なる声に正直に向き合い、分からないことを恐れず、新しい人生に向けて羽ばたきます。

熊本、さよなら。そして、新しい旅、初めまして。



誕生日を祝ってくれたホストファミリーと友達